―青春小説―

❖自らを越えて（3）❖

多谷　昇太

……こうやって成績でアピールしてお前に認めてほしいんだよ。声をかけてほしいのさ、お前からな。うふふ、可愛いじゃないか、花田。今度会ったらひとこと褒めてやれよ。そしたらアイツ、飛び上がって喜ぶぜ」やおら向かって行って野口の胸倉を摑む度胸は毛頭俺にはない。しかしこうまで白痴（コケ）にされればもう充分だった、すぐに立ち去ろうとしたがしかしどうしても花田のひとことが聞きたかった。絶対に彼らの目に入らないよう他生徒らの陰に逃げつ隠れつしながらかろうじて俺は踏みとどまる。だが豈図らんや結局それが俺に道を踏み外させるべく決定的な一撃と相なったのだった。

「つまらんことを云うな。俺と親しくしたいんだったら自分から声をかけてくればいいじゃないか。ふん、もしお前の云ったことが本当だったらそんなやつは男じゃない。前から虫の好かないやつだが、それなら今度会った時にこう云ってやろうじゃないか。おい、末成り、テスト頑張ったじゃないか。ご褒美に一つ、今度デートにでも誘ってやろうか？ってな。それで怒って向かって来るようなら見直してやるぜ」と花田はそう云ったのだった。デート云々を聞いて野口と佐藤が声を立てて笑う。野口が「無理、無理」と大仰に手を振ってみせる。俺はもう何もかも判らなくなって足元を乱しながら闇雲にその場から離れようとした。しかし悪い時には悪いことが重なるものでちょうどこの時ミユキという名の、いつも花田に秋波を送っている女子生徒がやって来て、更なる引導をこの俺に渡してくれたのだった。子悪魔的な、コケティッシュな感じのする女の子だったが、その悪魔的な超能力でもあったものか、花田一派らの会話と側に隠れている俺の様子までちゃんと摑んでいて、花田にこうご注進に及んだのだった。「おーやぶん（とは花田の渾名）、末成り君、すぐそこにいるよ。ほら」と隠れている俺を指差してくれたのだ。のみならず「可哀そうに。末成り君、顔を真っ赤にしてるじゃない。脅かしちゃダメだよ。この子、親分に認められたいんだから。ね、末成り君」。頭の中がすっかり真っ白になった俺はミユキも誰も委細構わずにこの場からただ離れようとす

る。誰かの足に躓いて見っともなくも床に転んだ。「痛いわねえ。ちょっとお、気を付けてよ！」声で女子生徒と知れたが謝るでもなく立ち上がって、更に誰彼にぶつかりながら去って行く。その俺の背に「おい、末成り、どこへ行く？！謝らんか！首席のお前がいなくなってどうする。俺がガリ勉村田だと皆に宣言せんか！」と花田。それへ野口、佐藤、ミユキらの大きな嘲笑が重なった…。

（三）悪夢

こんな顛末のあとでは俺は勉学に対する一切の意欲を喪失してしまった。予習復習もしなくなり成績は下がり続けた。話を飛ばすが三年生になる直前の進路指導時に担任から「どうした？」と注意を受け「そもそも（大学に）進学するつもりはあるのか？」とも詰問されたが最早どうでもよかった。一応「ある」と答え文系を希望とも伝えたが担任は俺の覇気の無さに舌打ちして「このままでは国公立への進学など思いも寄らないぞ」と宣ってくれたものだ。文系志望はもともと文学が好きだったので偽りのないところだったがしかし云われるまでもなく、進学自体が既に覚束ないだろうことは俺自身がよく判っていた。ではいったいどうするのか。もう一度勉学に励む気力はなし、かと云って他に励むものはなし…ないない尽くしだったが、だがこんな中でも俺には不思議と動揺がなかった。ただボーッとしてるというか、ボケーッとしているだけなのにそこに過不足を感じない。むしろこの状態にこそ変な落ち着きというかルーツのようなものを感じてしまう。その分けはしかし俺には分かっていた。俺が3才児の頃に母が死別して俺は姉と共に遠く離れた故郷の奄美大島へと帰された。親戚の付き添いがあったとは云え、幼い姉弟だけでのその時の流離いとその後の大島での暫しの生活による不安が、何とも云えない魂のコアのようなものとなって、その不安定さにこそむしろ変な郷愁を感じるからだった。つまりその後いくつ年を重ねてもパターンは違えど同じような強度の不安に陥る度に、俺は自らを〝怠りのベール〟で覆って、ナッシング・トゥ・ドゥの無為さの中に自らを置いて恥じず、いっさいを憚らなくなってさえしまうのだ。無為無策ぶりを自嘲し焦りはするのだが、同時にパラドックス的にそこに

前者の性癖が並存してるような状態？…と云えば判ってもらえるだろうか。とにかく、やんぬるかな、我ながら難しい御仁ではあったのだ、この俺は…。

あの一件のあと花田グループが俺を詰ることはなかった。それどころか俺と目を合わせようともせず完全に俺を無視していた。揶揄い癖が強いミユキなどは尚も俺を嘲笑したがっているようにも見えたが感心にシカトを守っている。思うに花田がすべてを仕切ったのだろう。反発も出来ない者をこれ以上追い詰めるな、詰るなとでも。なるほど人の上に立つだけのことはある、親分肌の生徒ではあった。今に通じるイジメに走ることはないし、廻りにもさせなかったのだろう。それは大いに助かったが俺にしてみれば唯一の拠（よりどころ）にしていた価値観（成績さえ優秀ならば皆から認められるという価値観）に信頼が置けなくなって、そしてその他には何も拠るものがなかったので、途方に暮れながらも、且つ腑抜けの様になりながらも毎日登校するしかなかった。出来るだけ遅く登校しては終日ムスーと机にかじりつき、終業のチャイムとともにまた黙々と家路に着く。その繰り返しだった。誰も話しかけて来ないし俺から会話を求めることも絶無。その苦しさに限りはなかったが致し方なかった。ところで突然変な例を引いて恐縮だが諸君は自家感作症という言葉をご存知だろうか？これは皮膚病の病名の一つで自己中毒症と置き替えられるべきものだ。肢体のどこかにひどい出来物があったとして、そこを掻きむしるとその部位の毒素が全身に廻るような塩梅でもって、全身に小さなブツブツが現れそこらここらを掻きむしるといった症状で、その痒さといったらないそうだ。で、云いたいのは、俺のこの孤独癖がこれに近いのではないかということである。すなわち必要以上に皆の目に見える自分（の姿）というものを意識してしまう自己中毒的な性癖を云うのだが。具体的には、いま俺は皆の目にどう写っているのか、このしゃべり方ではみっともなくないか。この仕草はダサくないか…等々で、これが俗に云う相手を疲れさせる症候群であるような気がするのだ。「このイモっ」か、文字通り「このつっかれる野郎」てな具合いで、暗黙のうちに皆から浮き上がってしまい、同時に皆のスケープゴートにされてしまうようだった。「こいつがいるから俺が（私

が）浮くことはない」という安全パイにされてしまっているとも思える。しかしそうなったらそうなったで今度は『そんなことは俺はまったく気にしない』とばかりに却って依怙地になって、ますますその役どころにはまってしまうのである。気にしないどころか、この孤独地獄に俺はほとんど発狂しそうなのだが…。

さてその頃から俺は学校終了後にまっすぐ家へ帰らずに某所に立ち寄るようになった。某所とは市立中原図書館のことで武蔵小杉駅のすぐ近くにあった（位置は変わったが現在でもある）。きっかけはちっともはかどらない受験勉強を自らに無理強いするため…だったのは間違いないのだが、しかし幾許もなく現実は違ってしまった。いくら場所を変えようとも教科書や参考書に数ページ目を通す内にすぐに気力が萎え、どうかすると眠気まで差して来る始末。いったいこのザマは…と訝しむことしきりでまったく合点が行かない。その代わり場所柄当然ながら万種の蔵書が廻りにはあって、その一画に頻繁に立ち寄っては目を通す書群があった…。

その前に…ここでちょっと失礼。度々お呼びかけして恐縮だが諸君らには次のような経験はないか？すなわち書店などに寄った際にいつの間にかある特定の本を手にしていたというような経験が。「特定の」とは「あなたにとって」という意味で、その本がいずれ強い影響と示唆をあなたの生き方に及ぼすことになる、ということだ。また逆にある種の本を手にした途端今度はなぜか眠気が差してくるという経験はないか？俺に云わせれば決して一概には云えないだろうが、前々章に記した守護・指導霊、もしくは悪霊の類の為せる業ではないかと思う次第なのである。その所以は覚えておいていただきたいが「人間というものは自分が思っている以上に〝何者かに操られている存在〟である」からだ。筆を認めているこの高校生時分から遙かな時を隔てた今だからこそ、得て来た体験からして、確信を込めて云えることなのだ、これは。何者かとは既に諸君には想像が付かれようが今は言明すまい。この小説の進行と共にやがてつまびらかにして行こう。決して異次元なる守護・指導霊だけとはそれは限らないのだ…。おっと、悪い癖が出た。俺は高校生、高校生…失敬、失敬。

で、話を戻すがその殆ど無意識の内に立ち寄ってしまう図書館の一画とは詩のコーナーで、分けても邦書よりは洋書、就中フランス象徴派詩人たちの本棚、さらに就中アルチュール・ランボーの著作が置いてある一画のことだった。受験の参考書などは放ったらかして、いつの間にか、操られるようにその一画へと俺は足を運んでいて、むさぼるようにランボーの詩編やそれら〝悪魔派〟の詩編を読み漁っていた。その悪魔派なる詩編がどんなものかと云うと、才ある諸君らには周知のことだろうが、敢てそれこそ〝象徴的〟な詩を一編、ここでご紹介しよう。著者はロートレアモン伯爵と云って、題名は〝マルドロールの歌〟というのだが、実は…。

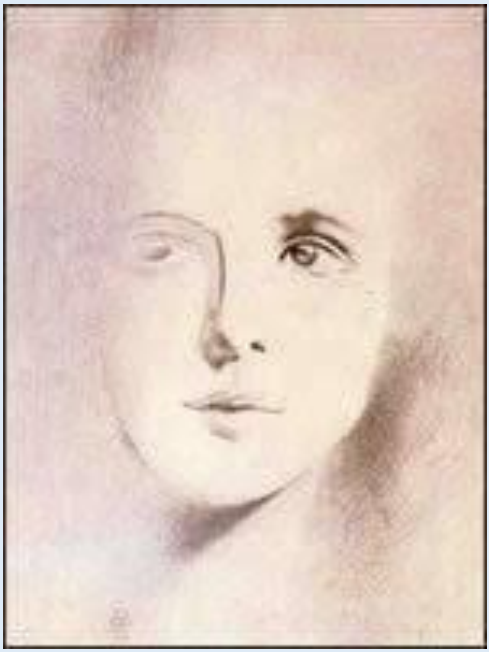
「マルドロールの歌」
おさなごの頬を切り裂き泣きわめく、
その顔見てはいたわりて、
汝（な）と我のきずな見しという彼の非人、
マルドロールの悍しさに、
その闇厭いて、ひとりだに、
吾（わ）を知らざらん外（と）つ国へと、
はるけくも斯く来たりしものぞ。
さるを…

「見て！あの非人！」
それ誰さし忌むや、云いおるや。
われ汝らを知らず、汝らも我を知らざるべし。
などさは云うぞ！？
非人の所業その返しとて、
な裂きそ我魂、さ言葉のナイフもて。
愛の切り裂き受けたとて、
泣いて応うべき我ならなくに…

…実は、この詩の作者はロートレアモンではなく俺自身である（もちろん「マルドロールの歌」というロートレアモンの散文詩集があって、この俺の詩はそこから題名をそのまま頂戴した次第）。わが拙詩を以てフランス象徴派を代表する…などとは烏滸がましさにも程があるのだが、ここは飽くまでも自伝的且つ私小説的な当小説の思惑からして、ひとつご勘弁願いたい。この〝自らの手で幼子の頬をナイ

フで切り裂いておきながら〃「おう、よしよし」とばかりにその子を慰め労わるというその件は、ロートレアモンの原詩をそのまま引いた訳だが、これを始めて目にした時にはさすがの俺も『いったいなんて奴だ』と呆れ果てたものだった。しかしよくよく原詩を吟味してみるならば、恐ろしくも情けなくも、『これは俺だ』と認めざるを得ないものがある。昨今は〃ふれ合い〃なる言葉がトレンドなようだが、本来人というものは「人間」という表記からも自明なように、人と人の関わりの中に於てこそ存在意義があるというか、その面目躍如を果たすべきものである。にも拘らず孤独の名のもとに、人間としてのその本地に立てない者ならば、恰も（魂の）呼吸が出来ない状態に陥る…と云えばオーバーになるが、それこそ自己中毒のような塩梅となってマルドロールの所業の如きものに転化しかねない。これを換言すれば人間というものはそれほどに他者との関係を求める、必要とする生き物なのにも拘らず、それが叶わなければ斯く奇形化さえしてまうということなのだ…。

ところでここに記した「外つ国」とはランボーの詩、いやランボーの放浪に憧れる余り、漠然とではあるが、自分のこの孤独癖という奇形を矯正する為には、一度日本を飛び出して外国を放浪するぐらいの刺激が必要か…などと思い始めていたことによるのだが、詩上では早くもその外国への旅（というか実際は逃げ！）が既に実現しており、なお且つその地でも非人扱いされるだろうことを危惧してい



【ロートレアモン伯爵の肖像】

る始末である。しかしそのような詩の設定や、まして外国での放浪旅云々などはここでは拙速に過ぎるというものだろう。なぜならその実行となると、この拙小説の終い章あたりのこととなるのだし、彼の地での沙汰となるとこれはもう小説そのものを改めなければならなくなるからだ。重ねて、拙速な話の展開はすまい…。

　さてこのような読書からの感化のみならず俺にはもっと馴染みの深いコネクションが、殆ど２４時間行動を共にする媒体というか、存在があることを前に述べたがご記憶だろうか？わが心の中で第一人称の思考形を取りながら常に俺に語りかけて来る異次元の存在、〝黒い霧〟のことであるが。特に花田との一件の直後などは『なあ、お前。これでよく分かったろう？いくら他人との交わりを求めて頑張ったって、結局はお前が惨めな思いをするだけだぞ。もう、よせよせ。止めとけよ』とばかり、当時の俺がショック状態にあることをいいことに、臆面もなく二人称の語り掛けをして来たものだ。そのことに悉皆気付かず『ちきしょう、ちきしょう！そうなんだよ、まったくなあ…。いくら俺が陰気だからって、あんな云い方を、揶揄い方をすることはないだろうに！もう、俺は…』などと呻吟するのみだった。黒い霧はさらに『だからさ、もう割り切れ！いいか、お前は他人との交誼など出来ない人間なんだ。そもそもだ、あんな連中と交わる必要などあるのか？ああやって連んでは人をいじめたり、小馬鹿にする連中なんぞ〝お前は〟相手にするな！』とけしかけるのだが、『…？』とばかりに俺が少しでも怪しんだりするとたちまち「お前は」を変えて、『〝俺は〟相手にすまい！』などと一人称思考に変えてしまうのだった。まさに自由自在で、このわが心中の〝他者存在〟に気付くことなどほぼ不可能である。一見俺を気遣うようなこの存在は、しかしハッキリおためごかしそのものの存在であり、係（かかずら）ったままでいるならば、やがては本人を廃人へと追い込んでしまうべき〝黒い霧〟なのだった。先の「いつの間にか我手中にある本」と相俟っての、こいつの働きを俺は次につまびらかにせねばならないだろう。話を一年先の二年生の終わり頃に持って行く…。